

歌誌 黄雞「夏号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 アンソロジー 2016〜2020 III

見ごろ過ぎ池埋め尽くす水芭蕉佇む女いとおり見遣る我おり

玄関に花木と写真飾る午後春を呼び込む二つの桜

カッコウの鳴き声わたり風のどか住宅街のわが散歩路

校庭の雨に垂れたるパンジーの傍ら歩む投票日の朝

日輪と蓮華つつじのフレームにヒコキ雲が余白を埋めて

黙々と雪溪登るスキーヤー滑り降りたる快感想えり

秋山路小さき花々咲き揃う短きいのちに頬も緩まん

黄に染まる銀杏と人のフレームにもう一色と待ち望むわれ

番組が五木ひろしを大御所と告げる平成最後の日の朝

雪の積む夜更けの下宿で語らいし学生時代の帰路は地吹雪き

露の世を覆ふ空気が乱れをり意思の表示を詠まん社会詠

初めての参政権得たる十八歳わが初行使の日想い起こせり

誰にでも潜む欲望「権力」はひとたび握れば離し難きもの

政界やスポーツ界のごたごたの元凶何れも組織とメディア

凶らずも七十路を越え尚更に思い描けぬ八十路への道